

人生、ひやくまで生きてきた

今年、厚生労働省が発表した100歳以上の高齢者は、全国で6万7824人に上ります。三豊市で、100歳以上となる人は81人（9月1日現在）。そこで今回は、大正時代から昭和、平成を駆け抜けてきた、人生の大先輩たちにインタビューし、これまでの思い出と長寿の秘訣を聞きました。



100歳以上の高齢者の皆さんを市長が訪問



9月12日、市内の数え年100歳以上の高齢者121人のうち、訪問を希望された48人を市長が訪ね、長寿を祝いました。

市内最高齢は、なんと108歳！長寿のまちへと移り変わってきています。

100歳になられた皆さん、おめでとうございます。これからもますますお元気で過ごしてください。



▲今年100歳を迎える人には、市長から内閣総理大臣のお祝いの品を贈呈



▲現在、地元のグループホームに入所中の永田さん。天気の良い日は、施設が管理する農園で作業を行うことも。この日は娘の栄子さんが付き添い、農園で撮影

丈夫に産んでくれた母に感謝

永田 勇さん
(山本町・大正7年生まれ)

「今でもよく覚えていたのが、大阪一の繁華街、心斎橋で食べた丼飯の味。給料は安かったけど、10銭でお腹いっぱい食べることができて、そらあおいしかったですよ」と、遠い昔を懐かしみながら話す永田勇さん（99）。

農家の次男として生まれた永田さんは、小学校を卒業後、16歳から21歳まで、大阪の反物問屋に丁稚奉公に出ます。

「私が働いていたのは大阪心斎橋でも有名な反物問屋で、当時は洋反物と呼ばれる毛織物を主に扱

っていました。景気もよく、店には頻繁に人の出入りがありましたね。街にも活気があって、楽しかったですよ」

しかし、好景気は長く続かず、支那事変（昭和12年）により状況は一変。日本は戦争の時代に突入しました。永田さんは、内地の衛生兵に従事し、負傷した兵士の救護、手当てを行いました。

「終戦の知らせを聞いたのは、高知県中村の山中で、本土決戦に備えて野戦病院を設営中のときでした。本土決戦とは名ばかりで、武器は無く丸腰。水筒も竹筒でした。物資の無いこのような状況で、ともに戦うことなんかできません。日本は負ける。誰もがそう思っていました」

終戦後、山本町に戻った永田さんは、地元の農機具メーカーで働きしました。3人の子宝にも恵まれ



▶勇さん（中央）と妻のスエさんに抱えられる1歳頃の栄子さん

定年まで勤め上げます。

「長年連れ添った妻が他界し、一人暮らしになりましたが、以前から通っていた料理教室が生活に役立ちました。料理のほかにも、書道、ゲートボール、陶芸などいろんなことに挑戦しましたね」

最近まで自転車に乗っていたという永田さん。元気の秘訣は、年齢に関係なく、いろんなことに挑戦する気持ちを持つことかもしれません。

「私の住んでいる地区の同級生は10人いましたが、今は私一人。こんなに長生きできるのも丈夫な体に産んでくれた母親のおかげ。感謝しないといけませんね」



▲70歳から通い始めた料理教室。得意料理は手打ちうどん



1時間でも ようけ生きておりたい

小野 鈴子さん
(山本町・大正5年生まれ)

ちょこんと正座して、にっこりと迎えてくれた小野鈴子さん(101)は、山本町で5人姉妹の次女に生まれました。子どもの頃は、毎晩、仏壇に手を合わせてから寝ていたほど、信仰心あつく育てられていたそうです。

20歳のときに結婚し、実家を継いだ後は、「働かな、食べていけん」と、もっぱら農業に励む生活。米やみかん、たけのこを取って生計を立てました。そして、子ども2人を立派に育て上げ、今は孫3人に、ひ孫8人、玄孫2人に恵まれています。

同居する息子の正士さん・百合子さん夫妻は、口を揃えて「お母

▲朗らかで、よく笑う鈴子さん。50代から始めた俳句のほか、大正琴や盆栽などにも打ち込み、多趣味に過ごしてきました



▲三豊高等女学校の学生時代は、実家を離れて寄宿舎に下宿



▲70～80代頃の楽しみは、大正琴の活動。公民館で練習したり、施設に慰問に行ったりと熱心に取り組みました(前列左端が鈴子さん)



▲90歳のときには、俳句や川柳、短歌の作品をまとめた句歌集を発刊



▲近所の人たちが100歳のお祝いをしてくれたときは、「涙が出るほど嬉しかった」と話します



▲「お母さんは友人や仲間、先生に恵まれてきたね」と微笑む、息子の妻・百合子さん

さんは怒ったことがないなあ」と笑います。「怒ることなんてない。毎日、楽しいことばかり。つらいことは忘らせて、つらいことだけ覚えとるんや」と言いつつ周りを和ませる鈴子さん。

今の楽しみは、週3回のデイサービスに通うことです。トイレや着替えなど、自分でできることは自分でしながら、「いつまでも生きていたい」と話してくれました。

100歳まで 長生きできて何より

曾根 キヨ子さん
(仁尾町・大正6年生まれ)



▲近くに住む、娘のアキ子さん。「お母さんは若いときからいつも化粧をしてきれいにしとったなあ」



▲約30年前、瀬戸大橋開通の記念に家族旅行。隣は娘のアキ子さん

夫・勘太郎さんとの思い出の一枚▶

昭和10年代、仁尾町で塩田が盛んだったとき、曾根キヨ子さん(100)も夫婦で働いていました。

「長靴が無かった時代は、素足での作業が大変だったんよ」。朝4時から働き、塩分を含んだ砂を箱に入れて塩田会社まで運ぶ作業をしていたと言います。

お嫁に行ったのは18歳のとき。嫁ぎ先で戦争を迎え、夫・勘太郎さんの弟2人は、戦地へ向かう途中に船の中で亡くなりました。「名譽の戦死やと伝えられたけど、(義父母にあたる)おじいさん、おばあさんが泣いてかわいそうだった」と目を潤ませながら話すキヨ子さん。

つらい記憶がある反面、覚えていいる嬉しい記憶は、平成11年に息子の康之さんが建設に携わった仁尾大橋の通り初めをしたことでした。「昔、塩田だったところも立派な建物が建ってきれいになった」と、まちの変化を振り返ります。

現在、キヨ子さんは息子さん夫婦、孫夫婦、中学生のひ孫さんと8人暮らし。「女子のたしなみ」だと毎日お化粧をし、好き嫌いくよく食べて過ごしています。家族や周りの人に、つねに「ありがとう」と感謝の気持ちを伝える姿が印象的でした。



▲100歳のお祝いには家族44人が集まりました。キヨ子さんは4人の子どもを育て、今は孫10人、ひ孫22人、玄孫が2人います



腹は立っても
けんかせんことが大事

藤田 彦一さん
(三野町・大正7年生まれ)



年とったら
かわいいおばあちゃんに
ならないかん

富永 ミサヲさん
(豊中町・大正4年生まれ)



▶三豊中学校を昭和11年に卒業。先生や友人の名前が次々と思い出されていました

「百まで生きるとは思わなんだなあ」
そう言っただけは笑む表情は、穏やかそのもの。古いアルバムを眺めて、「もう忘っせてしもた」とつぶやきながらも、蘇る思い出話を藤田彦一さん(99)に聞きました。詫間町に生まれた藤田さんは、三豊中学校(現在の観音寺第一高等学校)を卒業後、師範学校を経て、20歳で小学校の教員の道に進



▲「家族は大切に」が口癖のミサヲさんにとって、家族写真は宝物(次男の結婚式の写真)

笑顔が魅力的な富永ミサヲさん(102)は、豊中町で生まれ、18歳で大阪に働きに出ました。そこで出会ったのが、夫の重久さん。恋愛のち結婚すると、夫の仕事の関係で横浜に移り住むことになりました。
昭和14年、子育てをしながら寮母として働いているときに開戦。出兵した重久さんは、戦時中にシベリアに移され、4年間の強制労働を強いられました。
「本当は横浜で夫の帰りを待ちたかったけど、戦争が激しくなったので、実家の豊中町に逃げてきました。思い出の写真は持って帰れなかったなあ」と寂しさをにじませます。
終戦後は、4人の子どものだけで



▲97歳まで地域の人に誘われ、上高野文化センターの街角喫茶やイベントに参加

なく、幼い甥や姪の世話もしていたミサヲさん。夫の重久さんを支えながら、生活のために工場やおかし屋などへ働きに出ました。「人生つらいこともあるけど、みんな同じ。楽しまないかん」と明るく話します。
現在は一人暮らし。息子や娘、孫の妻などが順番に会いに来てくれます。自宅では娘・礼子さんが美容室を営んでおり、時にはお客さんと冗談を言いながら話を弾ませることも。「元気でいてね」「また会いに来るよ」という言葉が大きな励みになっています。
ミサヲさんは人生を通して、家族や地域の人、美容室のお客さんに愛されてきました。「人と会ったら、にこっとあいさつ。誰とでも優しく話すようにしています」と心がけていることを教えてくださいました。

みしました。大浜小学校に勤めていた頃は戦時中。「防空壕作って、空襲のたびに入った」と振り返ります。
25歳で結婚。28歳の頃に教員を辞め、農家として米麦やぶどう、桃などの果樹の栽培を始めました。「途中から農家になったけん、一生懸命にせな」との思いで、夜が明けてから暗くなるまで力いっぱい働きました。
その頃、藤田さんの妻・シゲミさんは、自宅で和裁や洋裁の学校「老の木芸学院」を開いていました。藤田さんも生徒募集のために三豊・観音寺内の中学校を数多く回って手伝っていたと言います。仕事と3人の息子の子育てが一段落してからは、シゲミさんや近所の友人たちと旅行に行くことが楽しみに。ハワイやグアムのほか、70歳のときには、夫婦で中国へ8日間のクルージング旅行にも出かけました。
今は息子さん家族と4人で暮らしている藤田さん。元気に長生きする秘訣を尋ねると、「気楽に生きる事が大事。腹が立つことがあっても、けんかはしたことない」と一言。ゆったりとした心持ちで過ごすことが何より大切なんですね。



▲昭和18年、25歳のときに結婚。3人の息子を授かります



▲夫婦で行ったクルージング旅行。ほかにも、たくさんの写真がアルバムに整理されています



▲息子の進さんとアルバムを見て、当手を振り返ってくれました



◀▲百寿のお祝いには、家族約20人が集まり、食事やカラオケを楽しみました



▲100歳を記念して、ひ孫からもらったプレゼントは大切に飾っています